慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黎乃涵著「辛亥革命與袁世凱」
Sub Title	Li Nai-Han : Chinese revolution of 1911 and Yüan Shih-Kai
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1952
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.25, No.1 (1952. 1) ,p.57- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19520115-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黎乃涵著「辛亥革命與袁世凱」

一九五〇年第三版　聯(生活・讀書・新知)書店刊

中國現代史において、辛亥革命のもつ意義は頗る大きい。それは單に、滿洲王朝の專制政治を轉覆し、共和民國を成立させたということにとどまるものではなく、中國革命のその後の發展過程を規定する歴史的基礎をなしたという意味で重視さるべきである。一般に辛亥革命は、民族主義革命としては一應の成功を收めたけれども、民主主義革命としては不徹底に終つたといわれているが、辛亥革命のこの不徹底さ、いいかえれば革命を不徹底なものに終らせた諸契機こそ、袁世凱の獨裁時代を現出し、封建的軍閥の對立抗爭時代を招來する有力な原因となり、また他方では、第一次世界大戰に始まる中國の政治・經濟・社會・文化各方面におけるあらたな發展と相俟つて、いわゆる國民革命の時代を展開させる基礎となつたものである。辛亥革命の研究が中國革命の基本的性格を明かにするための

重要な鍵とされるのも、この意味において至極當然というべきであろう。

ここに紹介しようとする黎乃涵氏の「辛亥革命與袁世凱」は、最近中國で刊行されている三聯（生活・讀書・新知）書店の新中國青年文庫の一つであつて、表題の示すとおり、清末革命運動の發生から辛亥革命を經て袁世凱の帝制運動が生れ且つ沒落してゆくまでの過程を取扱つたものである。著者の經歷については、現在のところ、はつきりしないが、思想的にマルキシズムの立場をとつていることは明かである。したがつて本書の內容も、マルキシズムの中國革命史觀によつて一貫されていることはいうまでもない。本書は全部で五章からなりたつている。その表題を一括して揭げると、第一章革命運動の發展、第二章 革命と妥協、第三章 袁世凱の盜國陰謀、第四章 大獨裁者と政黨政治、第五章 いかにして登場し且つ退場したか、以上であるが、これを內容的にみると、だいたい次の三つの部分に分けて考えることができるように思う。

第一は、序論的な部分であり、第一章がそれにあたる。ここでは、辛亥革命の發生に至るまでの革命運動の發展について述べられている。著者は、帝國主義諸國の侵入が中國の植民地化と同時に近代的民族資產階級の誕生を促したこと、この「資產階級と士太夫」の中から改革運動と革命運動とが生れ、前者は結局清廷を中心とする君主立憲運動にまで發展したが、帝國主義と結ぶ清廷の憲政準備は保身のための「欺騙政策」にすぎなかつたため、在野立憲論者の支持をすら失うに至り、革命運動の發展とともに革命情勢が次第に成熟していつたことなどを、史實を中心に考察している。そのなかで、とくに注目されなければならないのは、著者が、中國革命同盟會を「新興資產階級と地主階級の一部及び知識分子」をもつて構成された「反滿統一戰線」と規定し、同盟會の綱領は革命的であるが、革命の手段を定めた革命方略は、人民大衆・帝國主義及び封建勢力に對して非革命的であり、「革命精神に背離し僅に狹義の種族主義をもつて中心とするもの」（一〇頁）にすぎず、辛亥革命の失敗とその妥協的性格はすでにここに現れていた、となしている點であろう。なお、辛亥革命の直接の原因となつた「鐵道國有問題」及びそれと革命運動との關係にかんする敍述は、とくに詳細であり、興味深い。

第二の部分は、第二章及び第三章であつて、主として辛亥革命の經過とその性格について論じられている。著者は、ここで、武漢革命の成功後、革命派がさきの革命方略の影響によつて人民大衆を動員せず、却つて「封建軍閥・官僚及び立憲黨人」と妥協し（たとえば、革命を起した直隸、都督その他の要職に彼等を起用した如き）、その結果內部的不統一を招いて革命の徹底的實現を不可能にしたこと、また帝國主義は表面的には中立の態度をとつていたが、實際にはそのことが袁世凱及び反革命派にとつて有利であつたこと、などを指摘し、それらが北洋軍閥を背景とする袁世凱の「一方では滿清朝廷を射倒し、一方では革命を射倒そうとする」（五六頁）計畫を成功に導いたものであるとし、その根本的原因を、革命勢力とくに新興資產階級の弱體に、いいかえれば革命の客觀的條件の未成熟に求めている。

第三の部分は、辛亥革命の妥協的性格が、國民黨對袁世凱の對立時代を經て袁の獨裁政治體制の樹立に導き、ひいては帝制運動にまで發展してゆく過程の分析であり、第四章及び第五章がこれに充て

られている。ここでは、格別目新らしい見解もみられないが、袁世凱の帝制運動が失敗に終つた原因について、著者が、辛亥革命で表現された帝制・專制に反對する人民の意思と、袁世凱の沒落を豫知した舊社會勢力が彼を犧牲にしてその統治を維持しようとしたこと、の二つを擧げているのは、注目されなければならない。いずれにしても、本書の內容は、時間的には淸末から袁世凱時代にまで及んでいるが、その中心的課題は辛亥革命の性格の究明に置かれているといつても差支ないように思われる。

本書は、前述したように、新中國靑年文庫の一つであり、全部で一四〇頁の小册子にすぎない。したがつて、どちらかといえば、專門的學術書というよりは啓蒙書としての性質がつよいように感じられる。しかし、それだけに、マルキシズムの立場からみた辛亥革命及び袁世凱の中國現代史における位置は、簡明に定式化されているということもできるのであつて、この點は本書のもつ一つの長所というべきであろう。

いつたい、國民革命以後、中國で刊行される書物には、その時代の政治勢力の立場を直接に反映したものが少くない。この傾向は、第二次大戰以後において、とくに著るしい。最近のように、中國國民黨と中國共產黨とが限りない憎惡をもつて對立している狀態のもとでは、ほとんどすべての書物がマルキシズムと反マルキシズムの立場に分れており、それらを通して歷史の眞實を識ることは極めて困難である。しかし、そうであればあるほど、我々は、このような政治的意思によつて影響されない歷史現象の客觀的把握につとめることが必要である。定式化されたマルキシズムの中國革命史觀を正確に理解することは、そのための必須の條件であるといわなければならない。同時にまた、このマルキシズムの定式を規準として、これを批判的且つ實證的に檢討し、革命の發展過程を究明してゆくことも、中國現代史の正しい把握のための一つの方法として許されるのではなかろうか。この意味においても、本書は、現代史研究への手懸りを與えるものとして、十分注目に値する文獻ということができよう。

（石川忠雄）